

Altered Statesを読む

—— 変貌したものは何か ——

荒 牧 和 子

▶キーワード

Hotel du Lac
変貌

▼要 旨

Anita Brooknerによる第16作目の小説*Altered States*は、かなわなかった運命的な恋が、一人の男性の人生をどのように変貌させていったかが語られている。時を経て彼の恋人への想いは変貌しながら、なお続いていく。本稿では*Altered States*を軸に、Brooknerによるいくつかの小説を読みくらべて、作者のメッセージを読み解き、さらに変貌したのは小説の主人公の運命だけではなく、この作品が、作者の以前の作品から変貌を遂げていることを論じた。

序

*Altered States*は初老のイギリス人法律家Alan Sherwoodによって一人称で語られる。第1章では季節外れのスイスリゾート、ヴィフ (Vif) に滞在中のAlanが、鉄道駅で後ろ姿を見かけた女性は、かつて自分が激しい恋をした女性ではないかという思いを抱きながら、顔を確かめることもなく列車を見送るまでの心理状態が描かれている。第2章でAlanの青年時代にさかのぼり物語が始まる。Alanは父の病により遊学中のパリからロンドンに呼び戻されて、祖父の代から続く法律事務所を継いだばかりだった。そしてある日、パーティーの席で出会った異母姉の娘Sarah Millerに一目で魅入られてしまう。Sarahの住居を聞き出して夜毎に通いつめるが、彼女は不在の日々が続いた。そして、ようやく彼女の部屋で一夜を過ごし歓喜のときを持つことが出来たが、朝になるとSarahは完全に無表情だった。Alanは激しくSarahを求め、彼女は無関心で捉えどころがない。次の約束の日に訪れても彼女は不在で、その行き先もわからず、不在の説明も得られない。Alanの一方的な恋は成就するどころか、ほとんど始

まらないうちに失われる。AlanはSarahに恋文とも絶縁状ともとれる手紙を送ったが、期待に反して彼女からの返事はなかった。その後Alanは深く愛していた母親の再婚に衝撃を受け、以前から彼に関心を示していたSarahの友人と成り行き任せの結婚をする。未熟で幼稚な妻は夫婦の営みにおびえ、Alanは満足しない。思いがけずSarahが彼の法律事務所に現れたとき、Alanは我を忘れてSarahをパリでの密会にさそった。このときも彼女の反応はあいまいで、肯定とも否定ともとれなかった。妻には仕事と偽って来たパリのホテルで、Alanは一晩中むなしくSarahを待ち明かした。翌日、妻流産の知らせを受ける。そして流産に続く重い憂鬱症のために妻は自殺をとげ、11ヶ月の結婚生活は終わった。妻の流産と自殺は自分の不実（実現しなかった）が引き金になったとAlanは自責の念を持つ。数年後、Humphrey Millerの葬儀の席でAlanは髪を短く切ったSarahに再会する。Humphreyが遺言で住居を、姪であるSarahに相続させて逝ったために、老いた妻Jennyは住む所を失う瀬戸際にいた。AlanはSarahを説得してJennyを窮地から救ったが、それは同時に二人の決定的な別れのときでもあった。

最終章で再び第1章の場面と時間にもどり、ときおり愛人と会う以外は家族を持たない現在のAlanの孤独な境遇が語られる。タイトルのAltered Statesは、Alanの恋と実現しなかったパリでの密会がその後の彼の人生をどのように変貌させていったか、Sarahに対する思いがどのように変貌していったのか、さらには、現在もお続けている彼女を追い求めることの意味がどのように変貌してきたかなど、さまざまな意味がこめられている。変貌したのはそれだけではない。本論ではこの小説が、Brooknerによるそれ以前の小説から確かな変貌をとげていることを、同じ作者のいくつかの作品と読み比べながら考察する。

I. ヒロインたちの恋と家庭への願望

処女作*A Start in Life*のヒロインLuthは、幼時から“Cinderella shall go to the ball(シンデレラを舞踏会に行かせてやろう)”と歌う乳母の声を聞き、自分も舞踏会に行く日、すなわち幸せになれる日が訪れるのを信じてきた。Brooknerの小説に描かれているヒロインの多くは教養があり、大学講師や作家などの専門的な職業に就き、経済的に自立しながらシンデレラに憧れている。そして彼女たちは愛によって結ばれた結婚と家庭生活を渴望し、世の中の規範に外れない生き方を望んでいる。しかし理知的で慎み深く、ときには臆病で、おまけに誇り高い彼女たちは、自分から進んで男たちに働きかけたりはしない。ひたすら見出されるのを待っているだけなので、願望は達成されず、ヒロインたちは常に孤独の影を漂わせている。

Brooknerが描いてきた女性たちは現代的ではないロマンチストで、白馬の王子様を待ち望んでいるのだ。*Hotel du Lac*に描かれたEdith Hopeはロマンス小説作家としてエイジェントと昼食を共にしながら、女たちの願望について語っている。

They want to believe that they are going to be discovered, looking their best, behind closed doors, just when they thought all was lost, by a man who has battled across continents, abandoning whatever he may have had in his in-tray, to reclaim them. Ah! If only it were true. (HL 27)

これはBrooknerの小説に描かれたヒロインたちに共通した願望でもある。*Family and Friends*のMimiは、パリのホテルに恋人を招き一晩中待ち明かし、ただ待っていても恋は成就しないことを学んだが、そこから立ち直ることができずに、それ以後恋をすることはなかった。*Providence*のKittyは大学講師としてロマン主義文学を講じ、自らにも課したロマン主義的恋のルールに従って矜持とエレガンスを保ってきたが、彼女にとっては真剣な恋も相手にはゲームに過ぎなかったことを思い知らされる結果となった。つましく白馬の王子様を待っていても勝利者にはなれないのだ。

Brooknerは女性を、人生を上手に生きて幸運をつかむ悪い勝者と、幸運をつかむことが出来ず孤独に生きる善良な敗者⁽¹⁾に描き分け、後者をくり返し登場させてきた。誇り高いヒロインたちは勝者になることを願いながら、善良な敗者に終わってしまう。しかし*Altered States*に登場する女性たちは、そのどちらにも当てはまらない。普通の女たちが積極的に行動を起こして、ほしいもの＝結婚を手に入れた。しかし願望を実現させた彼女たちを待っていたのは決して幸せな人生ではなかった。身勝手な男に頼って幸せを期待してもだめだ。意気地がなく、女に頼り、受身の男たちは彼女たちの期待にこたえられなかった。20世紀の男たちは王子様にはなれず、救い出してはくれない。そこには愛と結婚に対する悲観的な作者の思いが映し出されている。

ポーランド人孤児のJennyは少女時代に祖国を離れてパリに来た。ウエイトレスとして働いたのち、図書館の助手になっても貧しさは相変わらず、アパートも持てずにホテル(下宿)住まいが続いていた。休暇中のパリで道に迷い、途方にくれたHumphrey Millerが偶然助けを求めたのが、カフェで隣の席にいたJennyである。Humphreyは案内に対する感謝の気持ちから「ロンドンへ来たらお寄りなさい」と誘ったのだろう。貧窮と孤独のパリ暮らしから逃れるために、Jennyはこの機会を逃さず、さっそくロンドンのHumphreyを訪問した。「ロンドンの友人に会いに行くついでに……」という彼女の言葉は哀れであると同時にしたたかさを感じさせる。Humphreyも兄を失ったばかりで、もともと伴侶もなく孤独だった。二人は孤独を癒すという幻想を抱いて結婚をした。Jennyは、切望していた家族を初めて手に入れたと思った。彼女の“I think of myself as a Parisienne. But now of course I am English, an English wife with an English husband and an English family”という言葉にAlanは“there was no irony”(AS 21)と皮肉な感想を持つ。作者のイギリス的ユーモアが感じられる一行である。しかしJennyが手に入れたのは一時の物質的豊かさだけで家族ではなかった。イギリス中産階級のMiller一族は異邦人の彼女を受け入れてはくれず、夫の財産を相続させてもらえなかった。もともとMiller一族の家庭は既に崩壊していて、彼女が期待するような家族は存在しなかったのだ。しかし孤児であったJennyには家族のつながりに対する過剰の期待と幻想があり、夫の姪であるSarahを娘の代理、擬似の娘とみなし、当然Sarahからもお返しを期待した。SarahがJennyの一方的な親密さに我慢が出来ないことを露骨に表明しても、家族幻想にとりつかれているJennyは気がつかない。Alanの配慮によりSarahが相続した住居に住み続けることが可能になったとき、いきさつを知らないJennyはSarahが自分を家族として愛しているという幻想を現実のものだと確信してしまった。Jennyの幻想にはAlanも架空の物語で手を貸している。妻や顧客の悲しみに冷淡なAlanがJennyにはとても思いやり深いのはなぜだろうか。Jennyはあまり好ましい人物としては描かれていない。そして、これまでのBrooknerの小説に登場した人物の中でもっ

とも異邦人性が高い。それに対しAlanはオクスフォード大学出身、法律事務所の共同経営者という職業を持つ裕福な中産階級のエリートとしてイギリス的なものを代表し、Brooknerの小説に描かれてきたヒロインたちが憧れる男性である。この対照的な二人がともに、Sarahを愛して拒否されながらSarahを求め続ける人生を生きている。そして、Aliceから見捨てられた「孤児」であることも共通点である。この二人を並べて描くことで、疎外感と孤独は異邦人だけのものではないことを作者は示したのである。

華やかなSarahの引き立て役として、いつも日の当たらない位置にいたAngelaは、パーティーを中座したAlanを追いかけて、ともに歩きながら世間話のなかで彼の行きつけのカフェを偶然知ることになった。カフェに先回りをして彼に近づき、Alanが彼女を避けるそぶりにもひるまずカフェに通いつづけた。この大胆さは、これまでのBrooknerの小説のヒロインには見られなかったものである。Alanが母親の再婚に動揺し、Sarahにも相手にされず途方にくれたとき、Angelaはただ独り彼の身近にいる女性になっていた。流感に罹ったAlanは彼女に助けを求め、そのまま結婚した。しかしAlanはSarahが忘れられず、心が通わないままの短い結婚はAngelaの自殺で終わった。

JennyとAngelaはともに変貌を希求し、以前の作品のヒロインたちに欠けていた積極性をもって、求めるものを掴み取ろうと行動した。ただ、彼女たちの願望は恋、結婚と家族のつながりなど、その達成を他者に依存していた。

Aliceは母親として人生を全うするのだと言っていたが、老後の孤独を思い、そこから逃れるためにイギリス紳士と再婚した。彼女は結婚の動機を“*He offers me kindness, care, generosity, and a social position. And perhaps the last is the most important. A woman on her own is rarely respected for what she is, and not always for what she does.*” (AS 79) という言葉で語った。後に、40歳の誕生日を迎えてもなお、母親の再婚に心おだやかでいられないAlanの“*Has he made you happy?*”という問いに、彼女は“*He delivered me from a solitary old age. You have no idea how that frightened me.*” (AS 160) と答えている。Aubreyは、妻を独占しようとする家父長制度的家族観を体現すると同時に、ある意味でちょっとした騎士道精神の持ち主として描かれているが、彼は文字通り親の世代の人間であり、消えてゆく過去の住人である。

Alanの共同経営者であり親友のBrianは、資産家の娘Felicityと結ばれ、妻を裏切りながら妻との間に二人の子供をもうけ、少なくとも表面的には平穏な家庭を築いた。Alanは子供の名付け親となり、Brian一家は彼の代理家族としての機能もしている。

“*They were married couple all but sex.*” (AS 5) と言われるMarjoryとSybil姉妹は、男性を当てにしない。Sybilはさっさと結婚に見切りをつけ、夫と幼い娘がいるうちから姉とともにシニアホームで暮らす老後を計画し（必要となる遥か以前に実行するのは異常だが）、二人で穏やかな老後を迎えた。姉妹は旧い結婚観、家族観から解き放たれて自由だったのかもしれない。Aliceがこの姉妹を変人だとしきりに言うのは、あくまでもAliceの主観であり、19世紀的の価値観、結婚観を持つAliceの目には当然変人ということになるだろう。

BrooknerはOlga Kenyonのインタビューで、“*Romanticism is not just a mode; it literally eats into every life. Women will never get rid of just waiting for the right man.*”⁽²⁾ と、語ったが、*Altered States*では待ちわびない女を描いた。待つのはAlanの方である。Sarahの来訪を4週間ひたすら待ち、パリのホテルでもSarahを一晩中むなしく待っていた。作者が描く20世紀の

男性はヒロインの期待を受け止められない。

この作品の中で唯一の幸せそうな家族の場面は、ヴィフのホテルに滞在中、レストランでAlanが見かけた、現地のスイス人一家の食事風景だ。Alanはそこに理想の家族像を見る。同時にBrooknerの家族への郷愁が感じられる場面でもある。遠い異国で見かけただけの家族の光景は、それがもはや手の届かないところにしか存在しないことを示唆している。

II. 改名と自伝的要素

Brooknerは1981年に処女作、*A Start in Life*を発表し、自身も53歳で作家として門出をして以来、現在まで正確に毎年一作の小説を発表し続けている。同時代の作家と比較すると、Brooknerは自身のことを公に語ることを好まず、Haffenden、Guppy、KenyonによるインタビューがBrooknerを知る数少ない手掛かりである。確かに、作家というものは作品で語るものであり、自伝的要素も彼女の作品中の人物や設定の随所に現れている。

Anita Brooknerはロンドンに移住したポーランド系ユダヤ人の家庭に一人娘として生まれた(1928年)。父は英語を解さなかったが、Charles Dickensの作品を通して、「正しいものが勝利をおさめる」のがイギリス的理想であるという信念を七歳のときから娘に植え付けたという。彼女自身はロンドンで生まれ育ったものの、イギリス社会へ適応することが困難で、常に違和感と疎外感を抱いていたことが、いくつかのインタビューで語られている。彼女がインタビューの中でイギリス人に対して使用する代名詞theyは、自分自身をイギリス社会の部外者と位置付ける彼女の意識を表すものである。両親がユダヤ人であることが疎外感の重要な要因の一つであることは想像に難くない。彼女自身はユダヤ人としての信仰を持たず、ヘブライ語を学ばなかったことを残念に思い、ユダヤ人社会にも疎外感を持つことを告白している⁽³⁾。作品中で反ユダヤ主義などに直接触れることはなく、この点に関して彼女は寡黙である。ところが、*Altered States*では、ポーランド人Jennyに対する、SybilとMarjorie姉妹の露骨な侮蔑的反応が、これ以前のBrooknerによる作品とは一線を画するほど明確に描写されている。

Anita Brooknerの父親は、当時のイギリス社会の反ドイツ感情に配慮してBrooknerから、より英語的な響きを持つBrooknerに改姓した。Brooknerの小説の中で人物の名前は、帰属する社会や身分と直接関係するものとされ、改名には重要な意図がこめられている。

貧しいポーランド人孤児のJadwigaは、故郷を逃れてパリに移住し、フランス風のEdwigeと名乗ったが異邦人の孤独で貧しい境遇は変わらなかった。Miller夫人となりロンドンに来てJennyと改名した後も、Miller一族の一員として迎え入れられることはなく、改名に込めた彼女の願望は実現されなかった。

Brooknerの小説の中には、二つの名前を使い分けて二つの世界を行き来しようとする者も繰り返し登場するが、多くの場合そのどちらの世界にも安住できない。

III. 母と息子

Brooknerは、小説発表の初期には「女性の孤独と結婚願望を描く作家」とまでいわれ、女性を描いた作品が圧倒的に多かった。男性心理の描写にかなりの筆をさいた小説としては、

*Altered States*以前に*Lewis Percy*、*Latecomers*、*Family and Friends*などがあげられる。*Altered States*では、作者は男性一人称の語りにより、母と息子の関係を検証した。

これまでにBrooknerは親であることを放棄した母親 (*A Start in Life*)、支配的な母親 (*Family and Friends*)、欲求不満のはげ口として娘を虐待する母親 (*Hotel du Lac*) など、いくつかの小説のなかで否定的な母娘関係に触れてきた。彼女自身の母はコンサート歌手のキャリアを結婚により断念したのち憂鬱症の傾向があり、自分の人生に満足していなかった。⁽⁴⁾ 作品に描かれる否定的な母娘関係は彼女自身の親子関係が下敷きになっているのかもしれない。

*Altered States*はAlanによる内部視点で描かれているので、当然、彼の叙述が真実であるかどうかの判断は読者にゆだねられる。Alanが母親との関係を語る時、理性的で感情に溺れず、自立した関係として語られる。しかし実際の行動はその言葉とは明らかに乖離しており、読者はその乖離の大きさから「真実の」親子関係を知ることになる、という二重の視点が存在する。Alanの結婚観といえば、ヴィクトリア朝以前にさかのぼる家父長と家庭の天使からなる家庭を理想とする古臭いものである。職場の窓から見える光景を描写して、建築様式の好みを述べる形で “I’m a Victorian.” と言っているが、実のところ、それは建築様式だけのことではないのだ。Alanにとって家庭とは “warm loving circle which would automatically respond to our needs and on which we could call in an emergency, should one arise”(AS 19) というものである。さらにHumphreyの結婚に際して “I think all men long secretly to find woman whom they can trust to look after them, with whom they can regress in the intervals of making love.” (AS 21) と評し、その点では、Humphreyは幸運をつかんだと考えている。つまり、たいいていの男たちは母親代わりに世話を焼いてくれ、ベッドをとともにし、悩みがあればその肩に頭を乗せさせて慰めを与えてくれる妻を望んでいるというのだ。自分自身の結婚については

I indeed saw marriage as a way of ensuring my mother’s safety, although I knew that she loved me as I was, without entanglements. My line of conduct was to be dictated by two conflicting duties, getting married in order to supply my mother and myself with something resembling a family, and staying unattached in order to stay my mother’s confidant. (AS 20)

と述べて、Freudの世界をのぞかせる。このような男たちと結婚をした女たちの惨憺たる結末はこの時点で予測される。

Aliceは自分の友人の父親と結婚をしてAlanをもうけた。当時はスキャンダルになったという。父親ほどの年齢の男性との結婚は、保護者と被保護者の安定した関係としてBrooknerの小説の中で繰り返し登場する。Aliceと同じ建物上階のフラットに住む紳士的なAubreyはAliceとの結婚を望んでいるが、Aliceは応じない。「なぜAubreyの求婚を受け入れないのか」と、Alanが訊ねるとAliceは “Were it not her position in life to be his mother?” (AS 49) と愛読書の一節を引用して応えたので、彼は「驚愕し恐怖を覚えた」と述べている。Alanは本当に心の底から母親の再婚を願っていたのだろうか。Sarahへの思慕を募らせながら会うことができずに悶々と日々をすごしていたときに、Alanは突然Aliceの再婚を知らされた。母親との関係について常に理性的な態度を装ってきたAlanは、「母はAubreyと結婚するだけでなくベッドを共にするのだ、という事実を不本意ながら何とか受け入れようと努め (下線筆者)」なけれ

ばならなかった。“I felt like Hamlet, though as far as I could see (and I had to concede this) Aubrey was not in the least like Claudius.”(AS 78) と嘆く。それでも何とか母を抱擁してキスをしたが、喪失感は深かった。

翌朝Alanは風邪に倒れた。Aliceの再婚にうろたえていた彼は、それまでは彼に関心を寄せカフェで待ち伏せをするAngelaを避けていたにもかかわらず、母親の代理として看病してもらうために家に呼んだ。そして成り行きのままに婚約する。Alanの母親依存はとどまるところを知らない。新婚旅行では母親の再婚相手の別荘に滞在して新妻の反発を買う。Sarahとの密会のためにパリ滞在中、Brianの電話で妻の流産を知らされたときには「とりあえず母に電話をする」と答えて「何はともあれ、すぐにもどれ」と親友にたしなめられた。

Brooknerは本来、高名な美術史家・美術評論家であり、彼女が小説の中で人物を描写するとき、まるでそれは肖像画を見るかのようなのである。Sarahは豊かな赤い髪とアイスブルーの瞳、強靱な鞭のようにしなやかな肉体の持ち主として描かれ、ラファエル前派の肖像画の女性に喩えられる。Sarahの黒いドレスも細部にわたって描写される。薄明かりの中を追いつがっていくAngelaの服装、髪、肌、細い脚は克明に描写されて美しい。Jennyの醜い足と小さな手、二人の異母姉の服装についても同様である。Humphreyの醜さも仮借なきまでに描かれる。しかしAliceの描写だけは「美しい人」、「いい人」などの抽象的な用語を使い、「ピンク色のほほ」など、やや具体的な描写もあるが、それは他の人物に比較すると極端に少ない。母親に対するAlanの感情は客観を許さないものなのである。父親については、「ほとんど覚えていない」という。Alanはオクスフォード大学を卒業してパリに遊学中、父親の病でロンドンに呼び戻された。したがって父の死は、彼が成人後のことである。それにもかかわらず、“Although widowed young, she had given me a pain-free childhood and had never visited her sadness on to me.”(AS 18) と述べている。父親はそれほど影が薄い存在だったのだろうか。あるいは、無意識のうちにライバルとしての父親を抹殺したのだろうか。別の解釈もある。BrooknerはGuppy、Kenyonのインタビューの中で執筆に際しては「一気に書き上げ、書き直さない」と答えている⁽⁵⁾。そのために、彼女の作品には矛盾する箇所が散見される。最終章以外は書き直さないという彼女の執筆姿勢は文筆家としての職業意識の低さとして批判されたこともあった⁽⁶⁾。父親に関するこの矛盾箇所は、インタビューでのBrooknerの発言を裏付ける一つの例なのかもしれない。本作品の中ではもう一箇所、Sarahの職業についてAliceが「パーティーの出前料理の仕事をときどきする。彼女はとても料理がうまい」と説明する場面があり、必ずしもあり得ないことではないが、Sarahは自身のパーティーの料理をAngelaにまかせているので、やや疑問に感じる箇所である。

IV. 髪を切るという儀式

Brookner作品の中には赤い髪の人物が必ず登場する。赤い髪は作者の自伝的要素の一つで、男性の場合にはいわゆるゴールデンマンに付与されることが多い。彼女の小説の中で、女性が豊かな赤い髪を切るという行為にはある意味がこめられている。それは、束縛を捨てて自己実現に掛けようとする意思の表明である。A *Start in Life*の中で、Ruthの豊かな赤髪は幼いRuthに頭痛を覚えさせるほどであった。大学卒業後、奨学金を得てBalzac研究の目的でパリ

に留学し、幼いころから彼女の肩に重くかかっていた家族への責任というくびきから、一時的にもせよ解放されたとき彼女は髪を切る。パリへ来たばかりのころ友人も無く、両親の知り合いである好色な老作家の家の女中部屋に下宿させられて、毎日図書館へ通う学究生活を送っていたが、街でHughとJill夫妻に出会い、その生活は一転した。二人の案内でパリを歩き、有名レストランで食事をした。そしてHughに「You don't have to go to the library every day. First thing tomorrow, you have your hair cut. Then meet me for lunch so that I can see what you look like.」(SL 97)と言われて、Ruthは髪を切り、重いコートも脱いだ。RuthはCharles Dickensから学んだ人生の規範を捨てた。

Ruth, who knew most of this by instinct, began to think of the world in terms of Balzacian opportunism. Her insights improved. She perceived that most tales of morality were wrong, that even Charles Dickens was wrong and that the world is not won by virtue. (SL 99)
She had much to think about; that was what was so agreeable about kicking over the traces. (SL 100)

彼女は束縛から解き放たれる喜びを知り、服装に関心を持つようになり、実らなかったとはいえパリ大学の有名な言語学教授と恋もする。そのうえBalzacの研究も進んだ。

Family and Friends の中で、MimiとBettyは豊かな赤い髪を持ち、ラファエル前派風のドレスに身をつつんだ少女として一族の結婚式の写真に納まっている。幼い姉妹が互いに髪を梳かし合う行為は、親の膝下で従順に過ごした清純な時代の象徴的行為であった。母親のSofkaにとって髪はほとんど神聖なものであった。

Sofka regards the girls' hair as being in the nature of her own possession, something that she will hand over like a sacred torch to whomever shall claim the girls in marriage. (FF 37)

Bettyが、結婚をして幸せをつかむという乙女らしい夢を脱してフォリーヴェルジュール(Folies-Berge's)のダンサーになる夢を抱いたとき、彼女は家族の反対を押し切って髪を切った。そして母の家を出てパリに渡った。一方Mimiはスイスの花嫁学校へ行くはずの妹を送って来たパリで、ふと美容院に入った。

In the Rue de Rivoli she stops instinctively outside a hairdresser's, then pushes open the door and goes in. She asks to have her hair cut, but when the hairdresser takes the tortoiseshell pins out of her chignon he exclaims with admiration and refuses to touch it. Amorously he brushes the red-gold waves, turning them with his brush this way and that; smart women waiting for his attentions join in the chorus of admiration and suddenly Mimi is suffused with happiness. She sits, glowing, her hair spread over her shoulders; she closes her eyes and takes a deep breath. She looks like Rossetti's 'Beata Beatrix' which she has seen in a reproduction in Alfred's collection. After this moment of happiness she submits to having her hair washed and dried and her chignon put up again. (FF 69)

Beata Beatrixは清純無垢な処女の理想の姿としてRossettiが描いた肖像画である。髪を切ることができなかったMimiは、ホテルの部屋で一晩中恋人が来るのを空しく待ちわびるという、Brooknerのヒロインにお決まりの苦い経験をした後、古い価値観を持つSofkaにいわれるままに、父親ほどの年齢の男性と、妻という社会的地位を得るための結婚をした。

*Misalliance*のBlancheはSallyとElinor母子と別れ、再び自分が孤独であることを実感した。愛人のもとに去った夫との関係に決着をつけて、一人での再出発を決意したとき髪を切った。さらに、この儀式には証人が必要であると考えたBlancheは、まわりの人々に「わたし、家を出ます」と宣言した。

叔父Humphreyの葬儀に列席するためにやって来たSarahの、短く切った髪を見てAlanは衝撃を受けた。Sarahが髪を切った事実の後ろには何があるのだろうか。そのいきさつも動機も作者は明かさない。Sarahはもともと自分本位で、古い価値観にとらわれておらず、決別すべき束縛が無かった。妻という社会的地位を手に入れるための結婚にも、ロマン主義的結婚にもあこがれていなかった。髪を切ったSarahはどこへ行こうとしているのか、読者はさまざまに推測するだけであるが、Alanの感慨

I longed to take her in my arms, to comfort her for her lost beauty, to let her know that she was now more accessible to me, that my previous anxieties were in abeyance, that we could perhaps at last meet on equal terms. (AS 176)

I felt oddly in a stronger position, as if her changed appearance had turned me into a more fatherly character, and I knew in that brief moment that if we were to come together I would, I hope smilingly, forestall her caprices and insist on my own centrality in this affair, which perhaps was no longer an affair but more of a meeting between adults, in which I would have my say, so long delayed, and perhaps even now too long postponed. (AS 178)

は、的外れで完全な誤解の上に成り立っている。ヒロインが髪を切るという儀式に作者がこめる意味を彼は知らないのだ。髪を切る女性は彼が理想とする家庭の天使像とは対極にある。AlanはSarahをつなぎとめておくことなど出来ない。

V. 文学の影響

Brooknerの小説が暗示している意味(隠喩)を十分に理解するためには、聖書やイギリス、ロシア、フランス文学についての知識と、フランス語の知識が要求される。さらに彼女のスタイルの特徴として、細部の描写と小さなエピソードの積み重ねによって小説が構成され、人物が語る言葉の意味や行為の動機が解説されないことなどがあげられる。それはフランス文学の伝統の影響であり、作者自身がインタビューの中で好きな作家としてあげているFlaubertの影響を受けているといわれている。個々の小さなエピソードが記録文学のように客観的につづられている彼女の小説の読者には、深い洞察が要求される。

もう一つの、彼女の作品と文学のかかわりとして、作中人物の読書があげられる。Brooknerの小説に登場する人物は読書家である。だが、知的で高い教育を受けているにもか

かわらず、彼らの多くは読書で得た教訓を実人生に活かすことが出来なかった。

*A Start in Life*のヒロインでBalzac研究者のRuthは文学を読み間違えたために、それに頼っていた人生も誤ったとさとした。*Providence*は大学講師であるヒロインのKittyが、Benjamin Constant著*Adolphe*を学生に講義しながら、それに沿うかたちでKitty自身のロマン主義的恋物語が展開する。

*Altered States*を読みながら、われわれ読者に通奏低音のように聞こえてくるのは、Goetheの*Die Wahrverwandtschaften*(『親和力』)である。Alanの読書の好みは、彼の順法精神を満足させる探偵小説であるが、母親に薦められて彼女の愛読書である『親和力』を読んだ。二組の親友夫婦が相手を交換して、あたかも自然科学の法則に従うように礼儀正しく、嫉妬もなく暮らすという物語に対してAlanは、“I had felt uneasy after reading it, as if it contained subversive material. And I already knew that without love one was condemned to that same aridity that prevailed in the novel.”(AS 101)と、感想を述べた。愛のない結婚について不安を覚えると言いながら、彼も他のBrooknerヒロインたちと同様、読書からの教訓を活かすことが出来ずに、Angelaと成り行き任せともいえる結婚をしたのだ。結婚式の当日のことはほとんど覚えておらず、列席した自分の異母姉を見て“I was very touched to notice that Sybil and Marjory had traveled up from Dorset. For a moment I wondered what they were doing at Angela’s wedding, until I remembered it was my wedding.”(AS 97)と、自分が当事者であるという意識が希薄であった。妻の料理の腕前を認めながら、一度も妻を愛したことはなかったと告白している。実際、AlanがAngelaを語る語り口は、常に批判的で愛情が感じられない。妻は、「男性としての脅威を感じさせない父親のような年齢の相手との、保護者と被保護者の関係を結婚に求めている」と評するが、それは自分に向けられるべき批判であることに彼は気づいていない。そもそも最初から母親の代理として看護婦代わりにAngelaを呼んだのはAlanである。妻が性愛を好まないからといって文句を言う筋合いはないのだ。Alanの身勝手な人物像を、妻のぬいぐるみの熊を無断で捨てたというただの一行で作者は表現した。(AS 94)そして、『親和力』においては、それは幼児であったが、この作品では、不慮の事故で命を落としたのは胎児であった。

VI. サスペンスとAlanの恋の謎

Brooknerの小説にはサスペンスや謎の要素が生まれ、謎は謎のまま最後まで明かされない場合が多い。例外は第3作の*Hotel du Lac*である。物語の最初からEdithは暁に、遠くでドアの閉まるような音を聞いていた。物語の最終部分でそれはNeville氏がJeniferの部屋から出てくる姿と重なり、Edithの決心を翻させるという、どんでん返しのストーリーの展開となる。伏線として張られていたものが最後に解き明かされるという正統派サスペンス小説の筋立てである。*Altered States*のなかで特に緊張感を漂わせる場面は、Angelaの流産が単なる偶発的な事故ではなかったかもしれないことを疑わせる記述である。(AS 136)読者を不安にさせるが、この謎もサスペンスのまま、最後まで解き明かされない。Sarahの人物像と行動も謎である。Sarahは、自分以外の者に関心がなく、他者とのかわりを拒否し、自分の考えを語らず、Alanの眼前に姿を見せたときの彼女の態度以外のことを、Alan(=読者)は何もわからない。

最も大きな謎はAlanがSarahに、これほどまでも魅入られてしまった理由である。Alanの自己紹介では“though I am hardly romantic by nature”、“being of a philosophical and, I like to think, stoical disposition.” (AS 39)、“I knew myself to be fairly dull, fairly unremarkable” (AS 30)、“My temperament which is stolid” (AS 6)などと述べて、常に情熱におぼれない性格であることを自認している。そのAlanが、Sarahとの最初の出会いの後で一転、次のように語っている。

Walking back through the misty park I already knew that Sarah was vain, unreliable, and feckless. In this I was correct. What I did not know — and this was something I never entirely managed to fathom — was the extent of her insouciance, her literal inability to take any matter seriously. I knew that if I fell in love with her I should be embarking on a long and hopeless odyssey of missed appointments, of telephone calls that were never returned, of explanation of absence that were infinitely more mystifying than the truth would have been, of sheer infuriating disappointment. But at the beginning of an affair one does not count the cost. Already I knew that there would be an affair, and that it would not lead to possession. This did not deter me: I had confidence in the strength of my own desires. If I felt anything in the nature of a warning I was brave enough to ignore it, stupid enough to castigate myself for just those dull virtues that turn men imperceptibly into good husbands. If I were to fail with Sarah it could only be because I was not good enough for her. (AS 31)

これはまさに、Brooknerが描くロマンチックなヒロインたちの恋に共通した特徴で、穏健、謹直なAlanの自己評価と対極にある。Sarahは彼にふさわしくない。彼もこのことは自覚している。Alanの一方的な恋は中世の恋に通ずるもので、現代的ではない。このことも彼は自覚し、“Grand passions are no longer the order of the day”(AS 6)と語っている。彼の恋の動機は最後まで不明である。Sarahはコミュニケーションを完全に拒否しているので、二人のあいだの理性的な相互理解は存在し得ない。共有したものがあつたとすれば、それは官能の感覚のみであろう。Alanはそれを次のように語っている。

I took this unbelievable gratification to be mutual: indeed no further proof of our inevitable conjunction was needed, or so it seemed to me. I never questioned my desire for Sarah, nor, oddly enough, hers for me. (AS 56)

しかし、超自然的なエネルギーとともに沈黙の中で行われたという行為が与えた肉体の歓喜を、Sarahも共有したという彼の確信を裏付けるものを本文からは読み取れない。AlanはSarahに愛を告白しない。必要が無いほど自明だと言う。これほど一方的な恋の謎はロマン主義文学の恋に根源的な謎なのかもしれない。

Ⅶ. ユーモラスな表現

Brooknerの作品は優美で繊細な文体と控えめな表現が特徴である。ユーモアに欠けるようにも見えるが、それは表現が控えめであるために一読しただけでは読者に気づかれにくいせいでもある。処女作*A Start in Life*は悲喜劇 (tragicomedy) ともとれる作品である。Ruth本人には重大で真剣な行動であろうが、その描写にこめられたユーモアには、読んでいて切ないような笑いにさそわれるものがあつた。*Altered States*ではどちらかといえばユーモラスな描写が少ないが、それでも、AlanがSarahを求めて彼女のアパートを訪れる場面で、しゃがみこんで郵便受けの開口部からフラットの中をうかがう自分のこっけいな姿勢を自嘲的に描写する場面 (AS 66) や、Angelaとの結婚後、不本意な妊娠によって妻が食事の用意を拒絶、再び外食を余儀なくされて、結婚以前に行きつけだったカフェを訪れたときの女主人の反応を語る場面など、随所に見られる。Adelinaは二人が自宅のメイドにするために引き抜いた元ウエイトレスである。

My reversal of fortune was brought home to me not by any dramatic circumstance but by the distinctly unfriendly attitude of Mrs. Daley at the coffee bar, where I was obliged to eat breakfast. Blaming me no doubt for the defection of Adelina, she would plant my coffee on the table in such a way as always to spill a little in the saucer. Thus, a refugee from my own home it appeared that I was not to be allowed to enjoy hospitality elsewhere. (AS 101)

結論

Anita Brooknerの小説中、最高の傑作といわれている*Hotel du Lac* に於いてロマンス小説作家の Edith Hope は、結婚式の当日に登記所の前で待っている婚約者 Geoffrey の目前を車で素通りして逃げ帰って来てしまった。Geoffrey は母親と二人暮らしであったが母と死別して伴侶を求めており、都心の新居、別荘、高級家具を用意し、妻となる人に裕福な生活を約束していた。Edith も妻子のある愛人 David と不安定な関係が続けながら、平凡な結婚とささやかな繰り返しの生活の幸福を願っていた。しかし Geoffrey は結婚した女性が仕事をするには懐疑的だった。彼と結婚すれば作家としての生活や自分の小さな庭など、それまでの自分の世界を失うことになる。Edith が「良識」をとりもどし、起こしたスキャンダルのほとぼりが冷めるまでのあいだ、親しい友人の計らいでスイスのホテルに送り込まれることになった。その謹慎中に同じホテルの客として滞在していた Philip Neville に出会い、名目だけの便宜的結婚を申し込まれた。裕福な Neville 氏は妻に去られた経験から安全な伴侶を求めていた。Neville 氏から “Your romanticism might keep rueful thought at bay for a time, but the thoughts would win out.” (AS 100)、 “What you need, Edith, is not love. What you need is a social position. What you need is a marriage.” (AS 101) と説得されて気持ちが傾いた。Neville 氏は結婚すれば今よりも、もっと自由に情事も持てるとまで言う。Edith は彼の考えを危険だと思いながらもうまく反論できない。David に「Neville 氏と結婚します」と知らせる手紙を投函するため、暁に部屋を出

たときに、女性の部屋から出てくる Neville 氏の姿を見たことがきっかけとなり、彼女は愛の無い結婚に疑いを抱いて愛人との不安定な関係に戻っていく。Edith の状況は何も変わらない。妻というステイタスが重要であれば彼女はどちらかの男性の求婚を受け入れるべきであった。しかし彼女は愛の方が重要であると考えたのである。

Brookner は Edith の選択に対して別の結末も考えてみたことを認め、インタビューの中で次のように語っている。

As I wrote it I felt very sorry for her and at the same time very angry: She should have married one of them— they were interchangeable any way — and at least gain some worldly success, some social respectability. I have good mind to let her do it in some other novel and see how she will cope.⁽⁸⁾

Altered States で Brookner は約束どおり、女性たちに Edith と逆の選択をさせて彼女たちのその後を検証し、Edith の選択が間違いではなかったことを示したのである。

引用

本文中の算用数字はページ数を表す。

1. Anita Brookner, *A Start in Life*, London, Penguin Books, 1991 (略号SL)
2. Anita Brookner, *Hotel du Lac*, London, Penguin Books, 1984 (略号HL)
3. Anita Brookner, *Altered States*, London, Penguin Books, 1997 (略号AS)
4. Anita Brookner, *Family and Friends*, Vintage Books, 1998 (略号FF)
5. Anita Brookner, *A Misalliance*, Vintage Books, 2000 (略号M)
6. Anita Brookner, *Providence*, Vintage Books, 1994 (略号P)

参考文献

1. Skinner, John, *The Fictions of Anita Brookner*, New York, St. Martin's Pres, 1992
2. Malcolm, Cheryl Alexander, *Understanding Anita Brookner*, South Carolina, University of South Carolina Press, 2001
3. Sadler, Lynn Veach, *Anita Brookner*, Boston, Twayne Publishers, 1990
4. Kenyon, Olga, *Women Writers Talk*, New York, Carroll & Graf Publishers, Inc., 1989
5. Haffenden, John, *Novelists Interview*, London and New York, Methuen, 1985
6. 現代女性作家研究会, 『アニタ・ブルックナー 孤独のプリズム』, 勁草書房, 1991

注

1. Kenyon, Olga, *Women Writers Talk*, New York, Carroll & Graf Publishers, Inc., 1989 p.14
2. *ibid*, p.15
3. Guppy, Shusha "Interview: The Art of Fiction XC VII: Anita Brookner," *Paris Review* 109 (1987) p.146
4. Kenyon, *Op. cit*, p.9
5. Kenyon, *Op. cit*, p. 15など
6. Joyce Carol Oates, "Writing for the Tortoise Market", review of *Undue Influence*, *Times Literary Supplement*, 30 July 1999, 19
7. Guppy, *Op. cit*. p.154